

〈研究ノート〉

宮の風景画について（続二）

― 熱田盛衰のおぼえ その三 ―

高瀬 福巳

名古屋のシンボルに「お城」が選ばれ、熱田のそれは「熱田神宮（以下は神宮と記す）」にされている。

いづれも広大な敷地に、数多くの工芸品を有する建造物が林立した古跡名勝の地であった。しかし今次大戦の空襲をうけて、その大部分は灰じんに帰し貴重な遺産が失なわれた。

とくに神宮は戦争の終わったのちも苦難の道が続いた。すなわち昭和二十年十二月に連合軍の指令にもとづき信教の自由がうちだされ、官幣大社の職制は廃止された。それまでの国の厚い保護、とくに経済上の援助は打切られ、宗教法人として自前で収入の方法を考え、神宮の運営を進めねばならなかった。

多くの国民は敗戦直後から住むに家なく、食料はとぼしく生きるのが精一杯の時代が続いた。道義は地に落ち信仰心は失なわれ、社会秩序は極度に乱れて、神宮の存続には幾多の困難が伴った。しかし時とともに敗戦の虚脱から少しづつ抜けだし、熱田に住む人が増えて町に活気が生れはじめた。神宮を包んでいた森は広く、劫火の及ばない老樹に新しい芽がふき出し、この勢に励まされたように、住民の間に神宮復興の声は盛りあがった。やがて造営会が設立され、昭和三十年にいたり新本殿が完成した。その後も神宮内外の整備は着々と進行し、神聖な地域にふさわしい市民の修養学業の場となった。

さて今回の題目の最後に神宮を取上げ、一応の仕上りしたい。神宮については創建、成立、歴史などは多数の文献があり、研究、調査は進んでいる。従って、ここでは風景画に必要な簡単な解説にとどめる。

記紀の物語によると、この地に日本武尊（やまとたけるのみこと）の形見である草薙剣（くさなぎのつるぎ）を、宮簀媛命（みやずひめのみこと）が祀ったことをもって神宮の起源としている。本宮の土用殿には祭神、熱田大神（あつたのおおかみ）（草薙剣）、相殿には天照大神など五神を奉斎し、伊勢神宮につぐ權威ある神宮となった。

神宮を管理運営する最高責任者を大宮司というが、古代より尾張氏が永く務め、尾張の要地に一族を配して豪族としても繁栄した。その勢力が衰えるにつれて、大宮司は藤原氏、やがて千秋氏と移り明治まで継がれてきた。

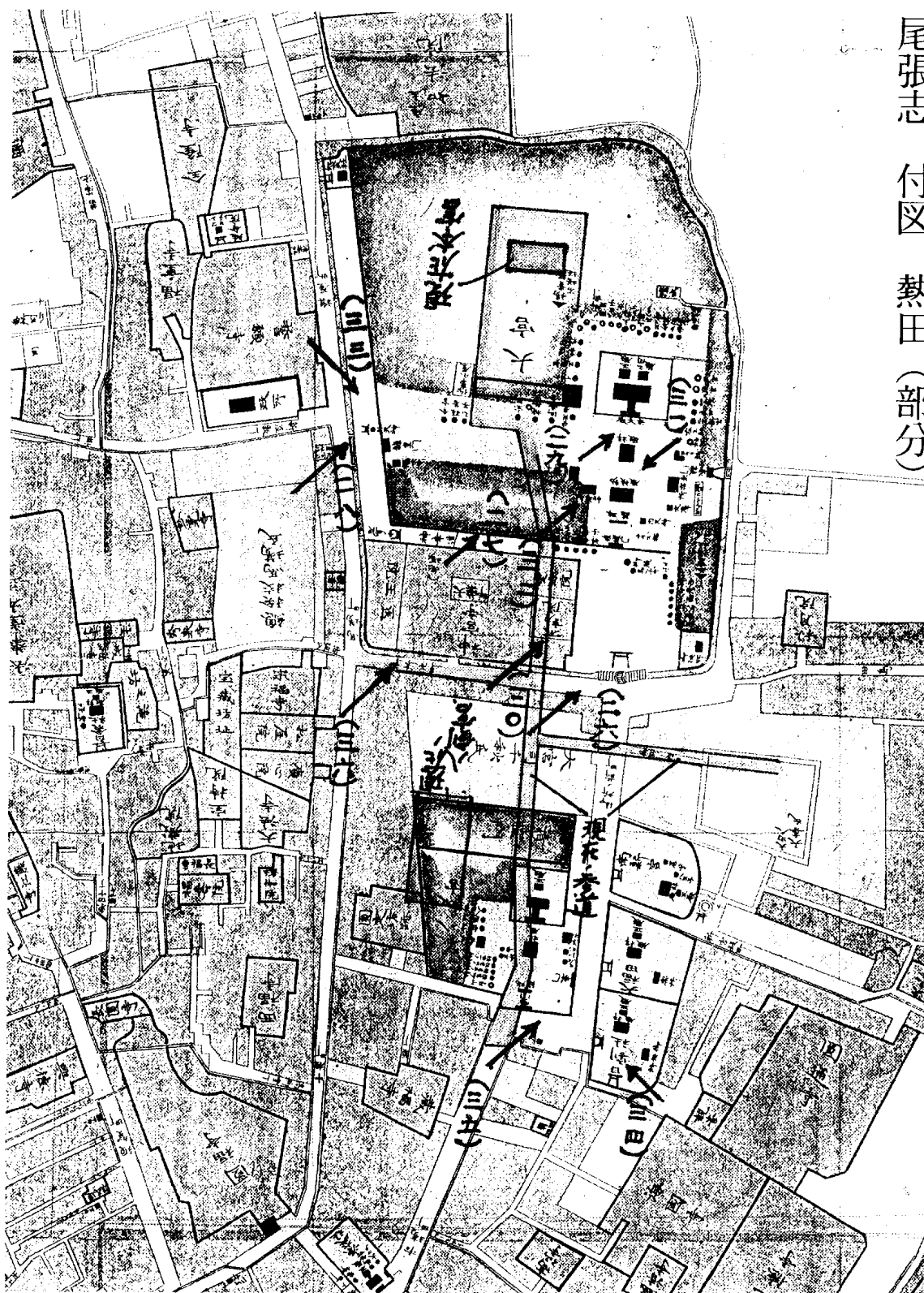
神宮の傳統をうけつぎ、神事に協力する人は五百に近く、また神宮の宝物は建造物のほかに刀剣や經典など四千点を越え、国宝や重要文化財に指定されている。

信仰の対照としての神宮だけに古くから傳わる神事は非常に多い。皇室の行事に強い影響を受けるもののほか、中世の神仏混交による祭典が加わってきた。その願望は農業の豊作、漁業の大漁にはじまり、衣料の確保などの生活の向上、厄除け招福などの健康の維持、さらに国家の安泰と平和な社会であった。これこそいつの世にも変らない祈念でなからうか。

風景画の解説にあたり、左の図の尾張志付図に前回と同様、絵の番号と視座を記入しておいた。

神宮は江戸末期まで、建造物の変化は比較的になかった。しかるに明治初期にいたり神仏分離令が公布され、神宮の仏教的施設は一掃されて神宮寺は消えさった。そのうえ付図に見るような神宮地域、大宮司邸、八剣宮地域は統合され、現在のような一つの大きな境内となった。さらに明治中頃には本殿、八剣宮などが神明造に改造され、参道なども含めて、その位置は大きく移動した。参考までに現在の本宮、八剣宮と参道の位置を記入しておいた。

尾張志 付図 熱田(部分)



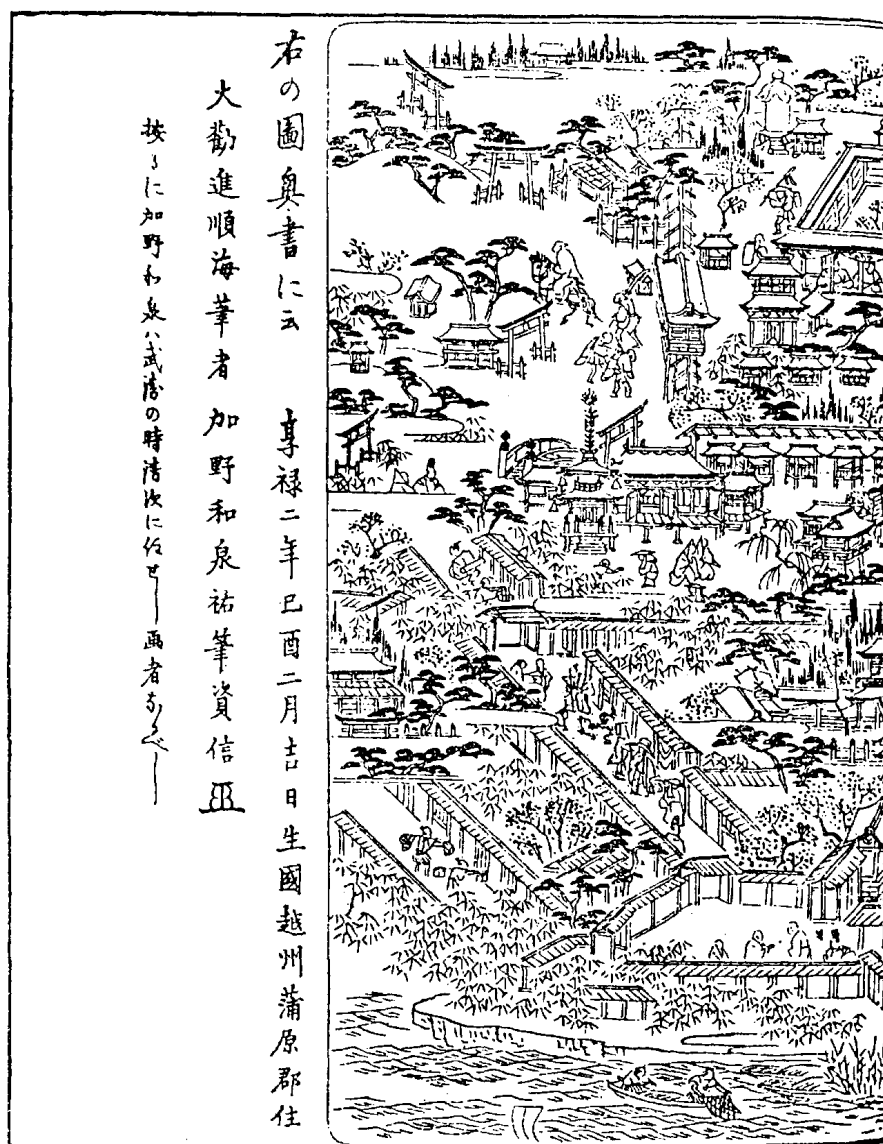
（二五） 熱田社享禄年中之古図



熱田社享禄年中之古図

い雅館摹
（印）

約六〇〇年前、室町期の神宮の古図が二枚残されている。その一枚、享禄年中古図を模写したのが上図である。中心を神宮にし神宮寺、八剣宮など海岸までを一括して南から画いている。広範の地域を表示するため、主な建物と人物に限定し、たとえば民家は軒先にとどめ、道路は歩く人でもって暗示した。人の服装や動きにも重点をおいて内容をふくらました。図を見るとまず本殿の回廊に



右の圖奥書に云

享祿二年己酉二月吉日生國越州蒲原郡住

大勸進順海筆者 加野和泉祐筆資信

按うに加野和泉は武隆の時清次に似せし画者あり

着座した神職三人が目立つ。その近くに笈おし(注七)を背にして諸國をめぐる巡礼、左の門を出たところは馬上の武者と長刀をかつぐ従者、正面の門の外では神官と僧侶が数人づつ向いあっている。正装しているところから儀式でなからうか。神宮寺の境内の僧二人は急いでいる様子。その左では物乞いの姿も見える。橋の南にこれから参拝するのか、下馬している。天びんをかつぐ男と桶を頭にのせた女は立話であろう。辺りの店先は、何が並べてあるのか客は品定めをしている。海岸近くは魚屋が多い。

(二六) 熱田大宮全図 其一



神宮の風景は前記の古図から三百年経った、尾張名所図会の三枚続きを選んだ。それは「熱田大宮全図、其一、其二、其三」の俯瞰図である。視野を西南方向にとり、南から北へ平行移動してほぼ全体像を画いている。

おひただしい数の建物の位置、構造、外観を正確に傳えるために他の題材の写実はかなり省略してある。その代表に神宮の広大な森があげられる。大木の深く繁った境内は当時でも上

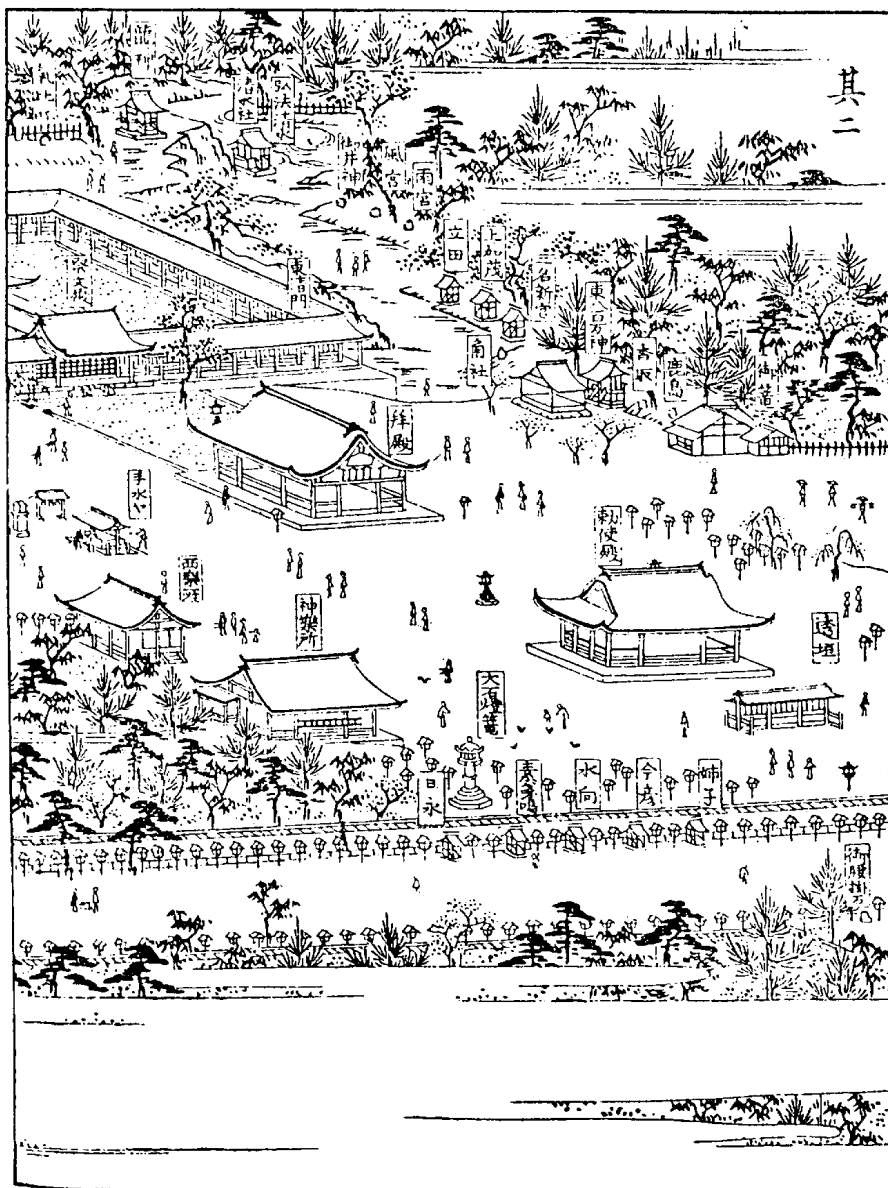


空どこから眺めても、建物は屋根が散見されるにすぎない。したがって特殊な樹木のほかは、樹種をあらわす略画にとどめ見通しをよくした。同じ意味で参道の道幅も実際の二三倍にとり、両側の建物をわかりやすくしている。

「其一」

神宮の周りは小さい堀をめぐらし、参詣には橋をわたり馬をおりることを促している。絵の下辺の「下馬橋」は板石を二五枚ならべた反橋で、二十五丁橋（廿五挺橋）ともいわれる。下馬鳥居をくぐり北（左）へ参道を進むと、丹塗の豪壮な海蔵門（注八）に達する。他方、右端の

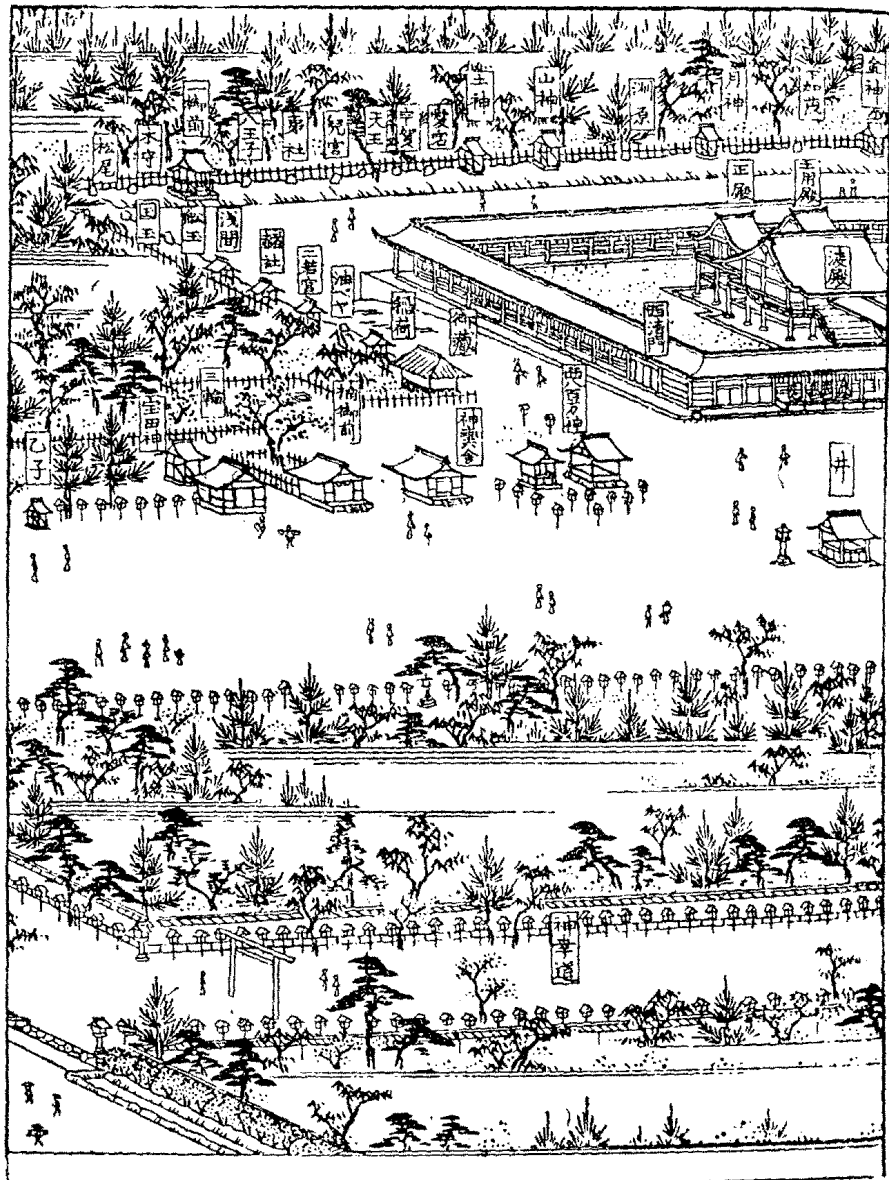
（二七）
其二



東鳥居から西（左）へ道をたどると春敲門（注九）が見えてくる。海蔵門の左右には信長堀が連なっている。瓦を積上げ土を石灰と油により練り固めた築地堀で現存している。今一つ春敲門の額も戦災からまぬがれた。題字は小野道風の筆といわれ、門からはずされていたのが幸いした。

画面の樹木は松や杉が多いように画かれている。しかし管理しやすい暖地性のクスをはじめ、タブ、ケヤキ、ムクなどの広葉樹や落葉樹が大部分ではなからうか。

「其二」 中央上部に正殿と土用殿が並立し、両者の中央前

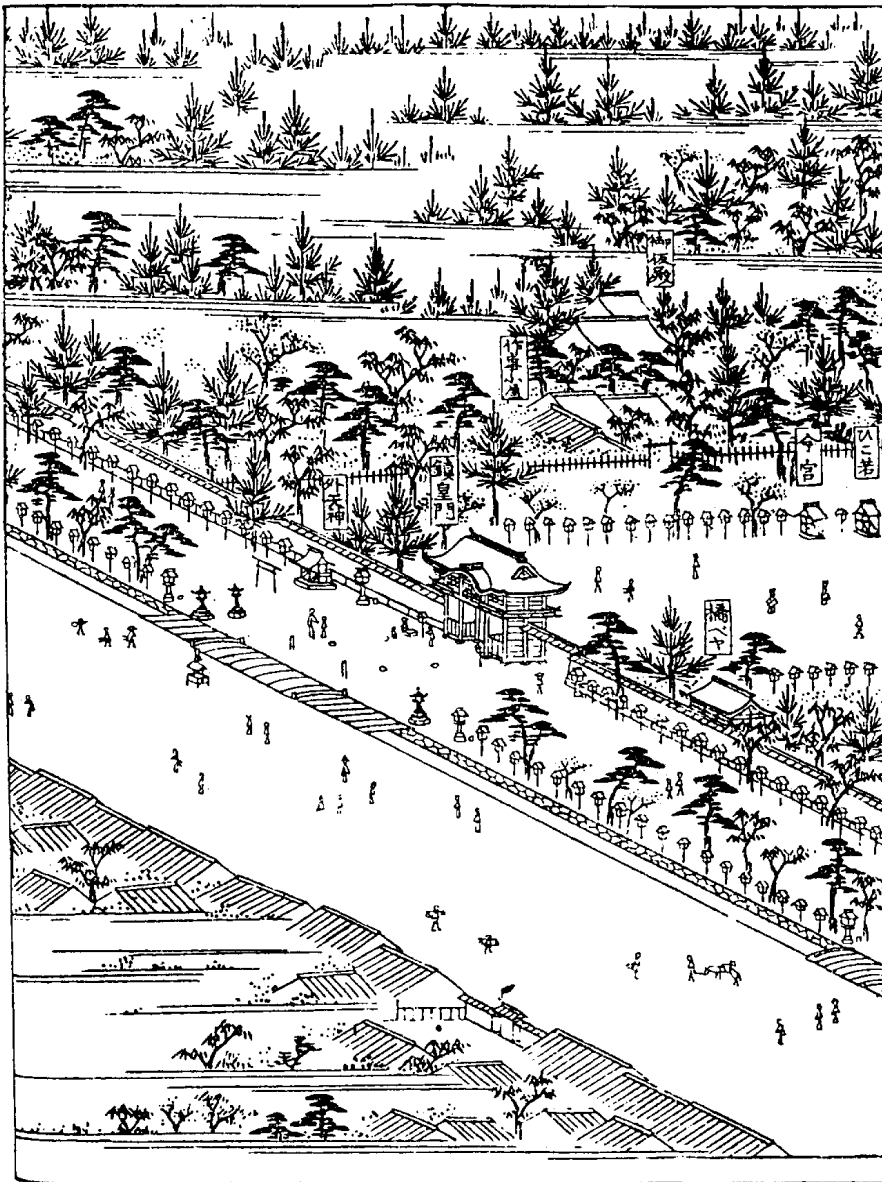


に渡殿^{わたどの}が建っている。神殿である正殿、土用殿は接近することが禁じられ、渡殿で通常の祭祀は行なわれた。これら本殿の四面には堅固な回廊をめぐるし、東西の清門しか出入は許されない。

回廊の外に数人の参拝人、さらに外側の堤のうえには二十余の小さい社や、石をそなえて祠の代りにした石神の名が記されている。それは本殿を守り仕える形の配置をとっている。

祭文殿より南へ拝殿、勅使殿、透垣、海蔵門と続く。門を出た神幸道には、両側に奉納された数百の灯ろうが鳥居まで並んでいる。境内にもいたるところ

（二八）
其三

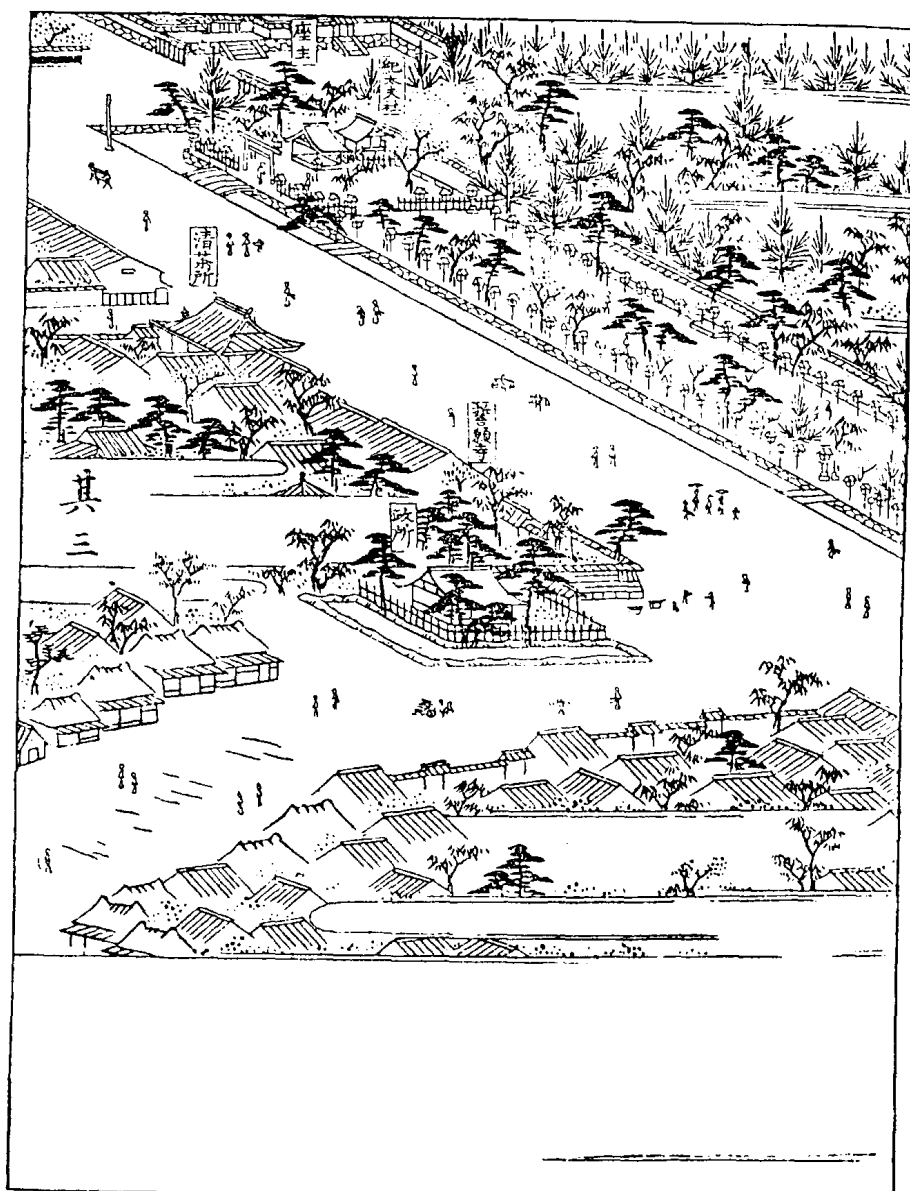


ろに献灯が建ち、なかでも神樂所の南に目立つ大石灯ろうは、佐久間灯ろうといわれ現存する。

手水をつかい、祭文殿の前で拝む人影は少ない。道行く人もひとりふたり、せいぜい家族づれで今のような団体や集団の姿はない。

「其三」 佐屋路を下る旅人は左上の「紀太夫社」を参拝したのち、鎮皇門をくぐると拝殿は間近になる。

神宮境内の東西南北には四強の神門、すなわち春敲門、鎮皇門、海蔵門と清雪門が配される。前三者は創建が古く貴重な建造物であったが焼失した。北



門は中世に廃されたが、不開門として八剣宮の北に残され清雪門とよばれる。

神宮へ通じる道には八強の鳥居が建ち神領地の区域を明示し、道案内の役割をはたした。

海上からは浜鳥居（前号七に記載）陸路は北方遠く一の鳥居（二四）その南の旗屋町に二の鳥居、東海道は築出鳥居（一）、西鳥居（一七）は白鳥陵に近く、東鳥居、下馬鳥居、中鳥居は上の図にのせてある。

前記の古図に比べると五重塔は消えており、逆におびただしい数の摂社、末社が画かれている。

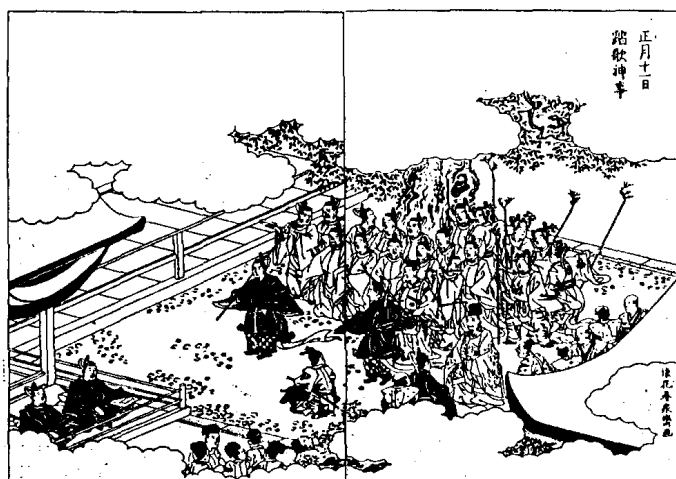
（二九）

踏歌の神事
とうか



由緒ある神宮ゆえに、むかしから傳わる神事や祭事はきわめて多い。その中で特殊な形式の他に類を見ない行事はかなり画材にされている。いずれも年に一回だけ、絵の完成に苦労されたことであろう。

踏歌神事はその一つで正月に行なう。踏歌とは大勢の神職が足を踏みならして歌い舞うという意味で十一日の正午にはじまる。冠に桜をかざった舞人と山吹をさした陪従のそれぞれ十人



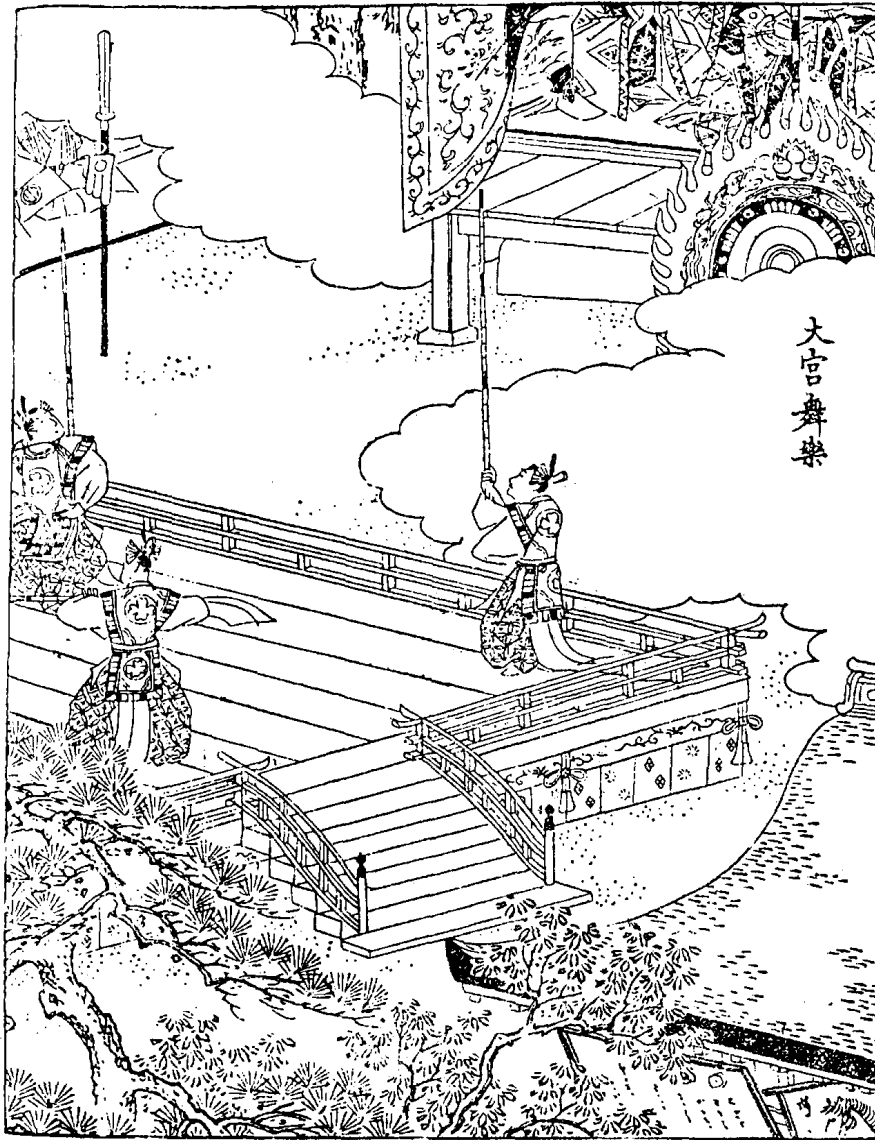
から成り、本宮などの前にて土地の精霊を鎮めて豊作と招福を祈る。歌につながるふみつづみの音をまねて、ベロベロ祭の別名もある。左は画家の異なる東海道名所図会からとった。



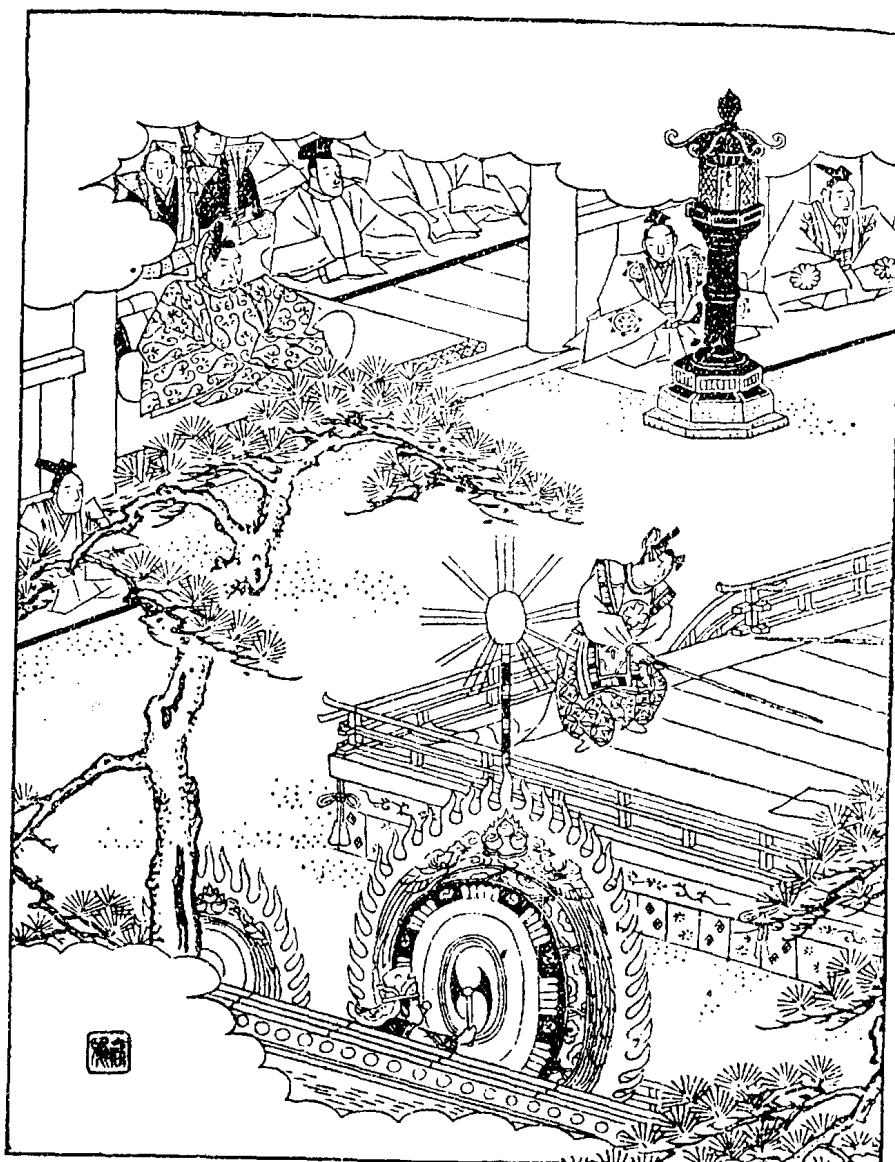
たれるのと同時に、的に走り
 よってうばいいい、その一部を
 持ち帰り魔除にする。

左の其二は射手のうち四人を
 輦れんたい台に乗せ、氏子がかつぎ「あ
 たったり、あたったり」とはや
 して町を練り歩いた絵である。

（三一） 大宮舞楽



舞楽とは雅楽を奏する中でゆったりと舞う、古式ゆかしい舞踏である。神宮では一度中絶したが、江戸期に再興され三月十五日に行なわれる。東西の楽所の間に舞台を設け、絵では左上部の勅使殿に大宮司が着座されている。西楽所の内で古楽器を奏し、東楽所の前では大太鼓が打たれる。調べにのって舞台では、かさね装束をつけた四人の舞人がゆったりした舞を披露する。一人舞、二人舞の曲目も



順次奉奏される。

舞楽の面は平安期以前からう
けつがれ、十一面が重要文化財
に指定されている。

舞楽は幸いにも神職や有志の
人により、左の写真のように保
存傳承されている。

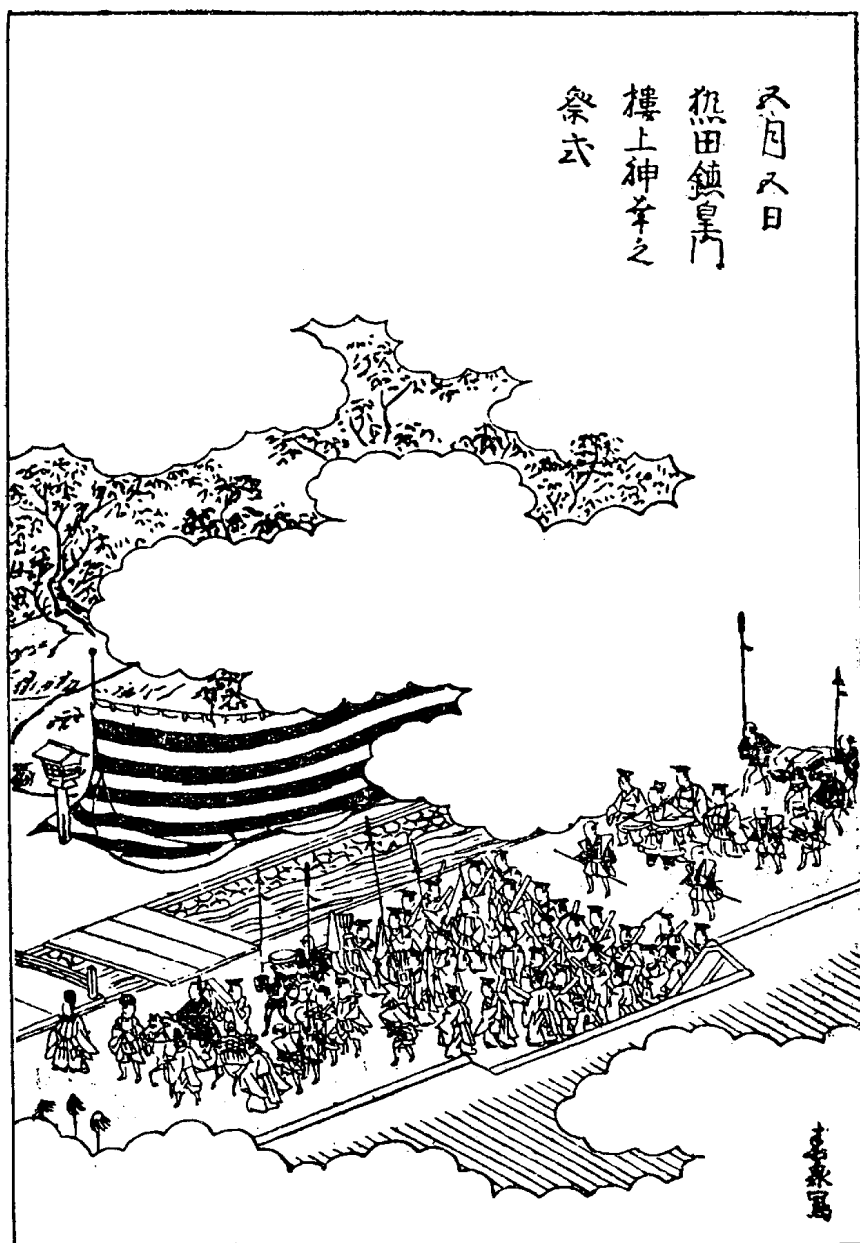
（三二） 大宮祈念祭・田植祭



農作物の豊作と国の繁栄を祈る行事で、二月の始めの巳の日を当てている。前もって神供米を政所より御供所へ運んでおき、巳の日の夜の十二時の神事に備える。

絵は前の舞楽とは逆方向の位置から画いている。真夜中のため、灯ろうに火を入れ、かがり火を焚き海蔵門の内外に数多くの火を点す。塩水で清めた道を、たいまつで左右から照らしつつ神供のひつぎを運ぶ。西の

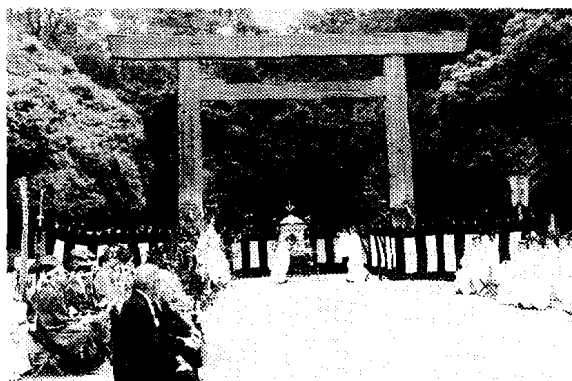
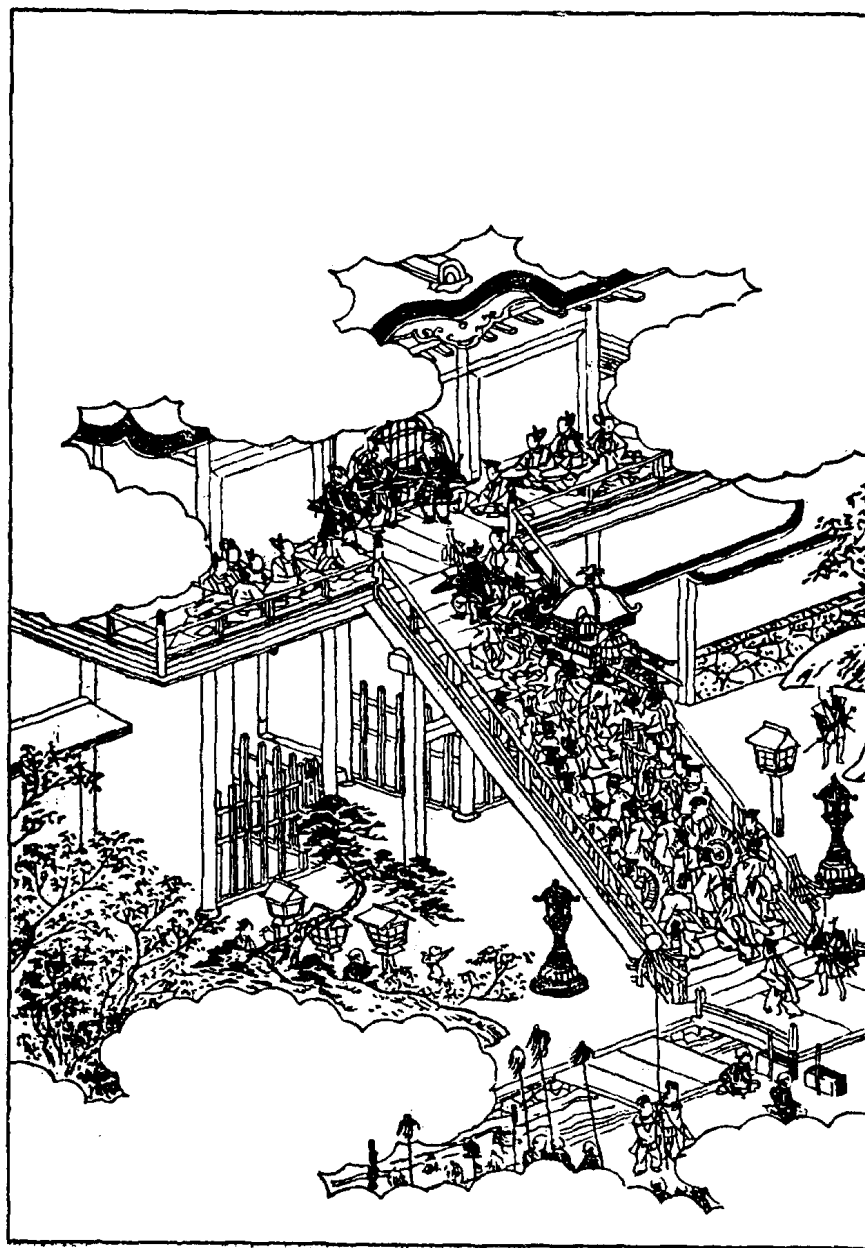
(三三)

しんよとぎよ
神輿渡御

神宮の西門すなわち鎮皇門は重厚な建物で、入母屋造の松皮ひわだぶきからできていた。神輿しんよ（注一〇）を五月五日にこの樓上にあげ、西方の皇居の鎮護を祈る行事で、門の名の由来にもなっている。この神事は神輿渡御又は神幸の祭式といわれる。

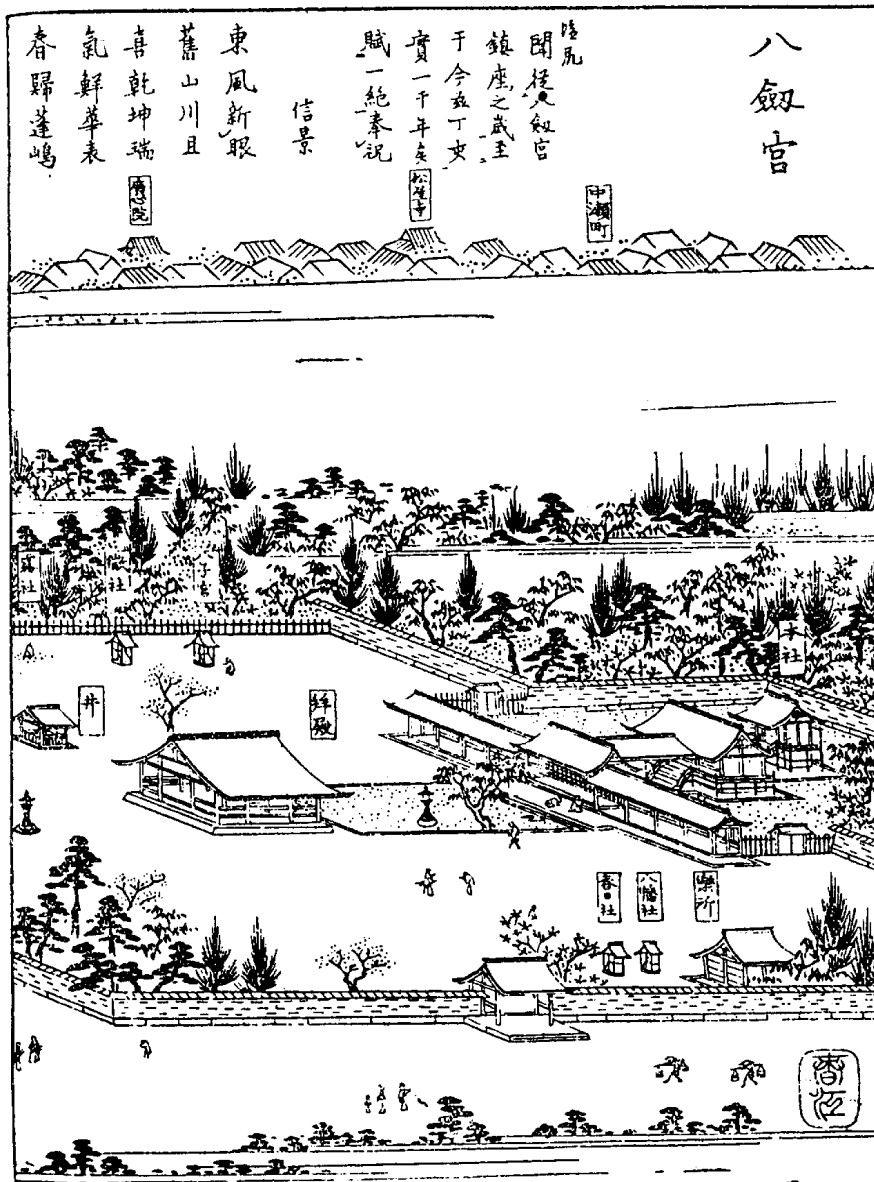
神輿は本殿を出て、海蔵門を通り神幸道から鎮皇門へ到着する。

上の絵は神輿が今にも樓上へ昇きあげられるところ、その下

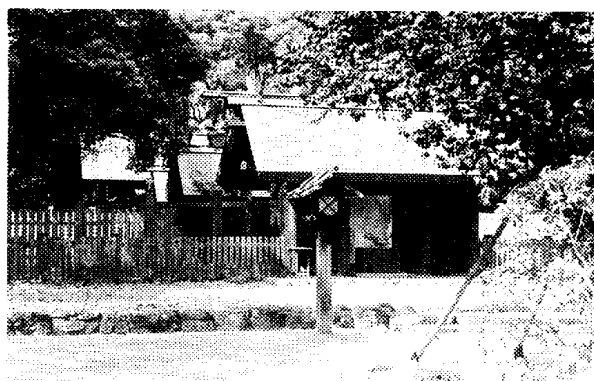


で多数の楽人が楽を奏している
 ようだ。橋の手前は騎馬の神職
 を先頭にして、鉾や弓などたく
 さんの執物とりもの（注一一）が続いて
 いる。色とりどりの装束をつけ
 た人達による、きらびやかな行
 列となった。左は鎮皇門あとの
 西門における現在の神事の一場
 面である。

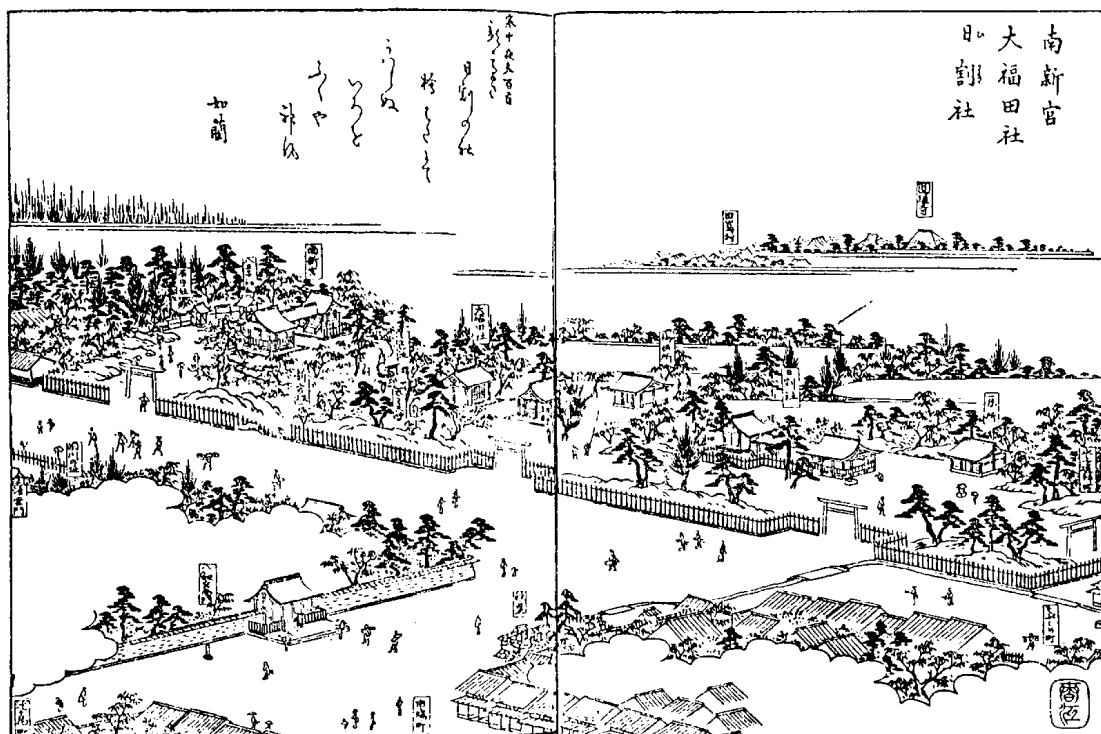
(三四) 八剣宮



神宮の摂社の一つで別宮又は外宮とも記されている。七〇八年に勅命により神宮とは別のところ、神宮寺の南に祠を建てた。八剣宮の名は八振りの剣の意味でなく、神剣を納めた永遠の社と解釈されている。建物の配置や構造は神宮によく似ているが、規模は小さく鳥居は見えない。祭事などは神宮に準じて進めている。明治期に神宮の敷地に統合し、建物の配置は変り神明造に改造された。南は繁華



な町に接し、東海道から便利の
地であった。
左は樹令三百年といわれる茶
人愛好の太郎庵椿をとおして、
現在の拝殿と本殿を写した。



（三五） 南新宮・大福田社・日割
社・南新宮祭

南新宮は八剣宮の東、清雪門のむかひに
当る社で天王社ともいわれる。その脇は急な
坂になり、新宮坂の名が今も残る。となりは
大福田社、さらに南に同じく摂社の日割
御神社が続いている。境内の端に土を盛り
上げた「氷上遙拝所」が見えている。氷上と
は緑区大高町の氷上姉子神社のことである。

南新宮を有名にしたのは、六月五日の祭礼
にくりだす大山と車楽でなかるうか。祭の日
は熱田郷の八つの町内から、輪番で大山一
輛、車楽（山車ともいう）二輛を引きまわす。
左の絵は正面の幕に天王社をかかげた田中村
の大山を画いた。



七段に組まれた頂上に小さい祠とからくり人形、中段に鯛や大蛇をかざり、下段は若衆が引手の音頭をとっている。引綱は太さ二尺、数十人がかかえこむように引いている。うしろに続く車衆は屋台をつくり松を飾りたて人形を置き、中段に子どもの舞を見せる。祭は中世に疫病が流行し、これを鎮めるために起ったといわれる。豪奢な巡行も、残念ながら明治二十七年以降は中止された。

かわって夜祭りとして、浜に提灯をつけた巻藁船が出るようになった。熱田祭は尚武祭又は菖蒲祭ともいわれ、もともと神輿渡御の五月五日であった。それが明治五年から六月二一日に変わり、さらに梅雨期の天候不順のため昭和二十四年から南新宮祭の六月五日にあわせ、盛大な祭となった。熱田の人口の減少と生活様式の変化から、船は一度中止されたが、昨年より規模を小さくして復活した。

(三六) 神宮寺



一般に神宮寺とは、中世に神佛の調和融合の形態として、神社に付属して開かれた寺である。熱田神宮では傳教、弘法の両大師により開基され、木津山神宮寺大薬師がそれであり略して大薬師と呼んでいた。

海蔵門の外、二十五丁橋の西に建ち南に面した本堂の薬師堂、左に医王院、右に愛染明王と不動明王をまつる堂を配置した。不動堂は享祿の古図の多宝塔の跡に建てられた。

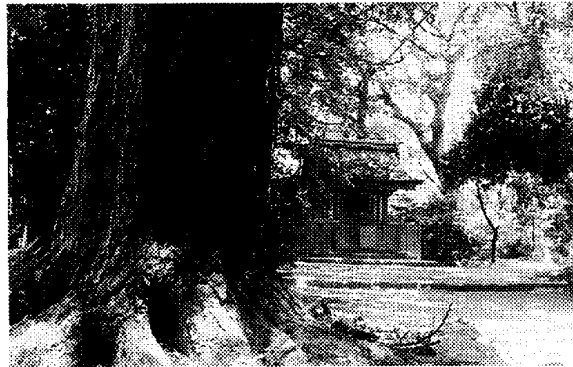


左は正月五日夜の珍しい鬼祭の行事、修正会しゅしやうえ(注一二)を画いている。

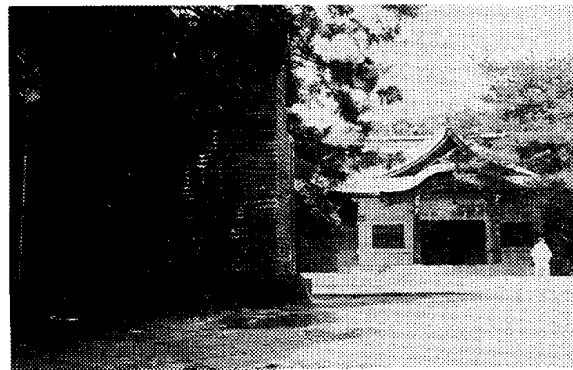
赤鬼が長い青竹のたいまつを横にして、若者ともども鉦や太鼓の鳴る中を本堂を三回走りまわる。真黒なやみの中に激しくゆらぐ火を見て、寺の板縁で手をあげる男達は寒さを忘れているようだ。明治維新の廃仏毀釈により、寺は取りこわされ行事も絶えた。

(三七) 現存の建造物など

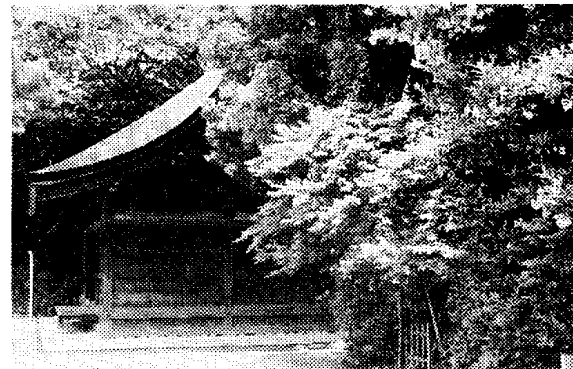
写一



写二



写四



写三



長い年月の風雪に耐え、数回の空襲に焼残った文化財は決して多くない。疎開できない建物となればなおさらである。そこで図会に画かれた有名なものの現存の姿を写した。(写一)は南新宮。神宮には珍しい流れつくりの丹塗の本殿が老樹におおわれた木の間の光をうけている。(写二)は信長塀といわれ織田信長が桶狭間の戦勝記念に奉納した塀である。塀の右端は海蔵門の柱の位置で、右にかけて門が建っていた。向うの祭文殿の位置へ、戦後に神楽殿が再建された。(写三)は不吉で忌み嫌われた不開門の清雪門、

写五



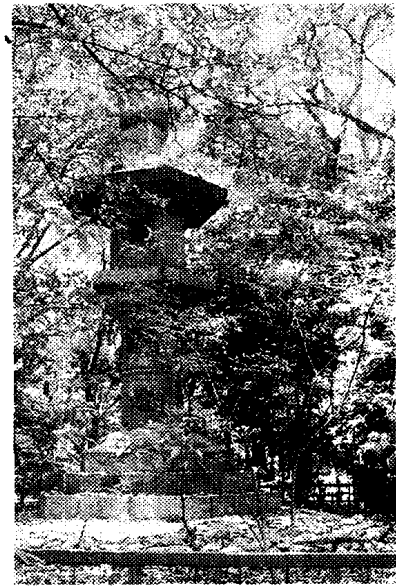
写七



写八



写六



斜裏からかんぬきを写した。
 (写四) は数少ない残った建物の一つの端正な西楽所。舞楽神事や豊年祭などに引続いて使用されている。手前の美しい若葉は何代目かに当る不実梅で、ここへ移植された。
 (写五) は板石を半円形にならべた二十五丁橋、(写六) は大石の佐久間灯ろうである。
 神宮の歴史的景観は古い植生による緑の地帯により支えられる。(写七) はその一部の東参道近くの樹林、(写八) は代表として神木にふさわしいクスノキ、樹齢数百年のこれらの大木は数本が生き残っている。

結 び

郷土史の一環として、むかしの熱田の風景について絵画を通して具体的な展望を試みた。そのため尾張名所図会に掲載された版画を主体に、約百枚についてそれぞれの内容を詳細に検討し、二年にわたり現地を調査し数百枚の写真をうつした。

傳統ある神宮から末広がる町だけに、風物に関する記録や案内記は数多い。しかし絵画の分野では内容が自から異なり、いくつかの史的な興味が掘起されて、熱田の町を見直すことができた。

今という新聞とテレビの違いに近い。新聞が文字のメディアとすれば、テレビや写真は画面のメディアであり、現代に生きるわれわれは両者をほどよく利用して、社会全般の知識を得ている。その意味で、明治以前の宮の宿場の風物を知るうえに、絵画は大きな役割をはたし史実に高い貢献をしている。

（注七） 笈おひとは修験者や行脚僧が、仏具や衣服を入れて背負う箱。

（注八） 海上門ともいい、本殿の正面の南の正門であった。春敲門、鎮皇門と同じ六八六年に建立された。

（注九） 東門で、この名称は春は当方より来り敲たたくという意味である。

（注一〇） みこしのことで、神幸の際に神体かみが乗るとされた輿こし。

（注一一） 採物とりのものとも記し、神職が神事に際して櫛、幣など手にとりもついろいろの道具。

（注一二） 寺で正月元日から三日間又は七日間、国家の隆昌を祈る法会。

参 考 文 献

愛知——史蹟郷土史—— 講談社

白鳥・開校百年 白鳥小学校

愛知——歴史と文化—— 講談社

愛知県の歴史 塚本学・新井喜久夫 山川出版社

熱田区誌 熱田区制五十周年記念誌編集部会

熱田神宮 篠田康雄 学生社

熱田神宮とその周辺 田中善一 名古屋郷土文化会

熱田風土記 卷一〜卷八 池田長三郎 久知会

生きている名古屋の坂道 岡本柳英 泰文堂

尾張志 愛知県郷土資料刊行会復刻

尾張名所図会 上、中、下巻 愛知県郷土資料刊行会復刻

郷土の調査法 中野尊正 古今書院

古地図への旅 矢守一彦 朝日新聞社

五万分の一地図 井上英二 中央公論社

史跡あつた 熱田研究よもぎの会 泰文堂

宿場と街道——五街道入門—— 児玉幸多 東京美術

地図を読む 五百沢智也 岩波書店

地図の歴史 織田武雄 講談社

地図でみる名古屋の市街地の変遷 名古屋都市整備公社

張州雑誌 愛知県郷土資料刊行会復刻

東海の風土記 中村栄孝 吉川弘文館

名古屋南部史 名古屋南部史刊行会

名古屋の史跡と文化財(新訂版) 名古屋市教育委員会

名古屋の町 伊藤徳男 中日新聞社

南区誌 名古屋市南区役所

南区の歴史 三渡俊一郎 愛知県郷土資料刊行会

明治の名古屋 服部証太郎 泰文堂

明治の名古屋の事物談 服部証太郎 泰文堂